音楽演奏による感情喚起についての心理学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: YAMASAKI, Teruo メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3893

BY-NC-ND

音楽演奏による感情喚起についての心理学的研究

心理学部　心理学科　山崎　晃男

近年、音楽と感情についての研究が心理学、生理学、脳科学などの分野を中心に盛んに行われるようになり、実験室および日常生活の両方において音楽が様々な感情を喚起することが繰り返し確認されるとともに、そのメカニズムについての解明も進んできている（cf. Juslin & Sloboda, 2010; Peretz & Zatorre, 2009）。ところが、それらの研究のほとんどは音楽聴取が感情に及ぼす効果についてのものであり、音楽を演奏することが演奏者自身にどのような感情的効果を及ぼすかについては、僅かな例外を除いて、国内・国外ともにあまり研究されていない。また、研究がなされる場合も、その多くがプロもしくはセミプロの音楽家の演奏不安といった否定的な感情喚起についての研究であり、演奏することの肯定的な感情的効果についての研究はきわめて少ない（cf. Steptoe, 2001）。そのような中、筆者はこれまでに 2 台のピアノによる合奏についての実験的研究を実施し、非音楽家の演奏者による合奏および練習活動が演奏者自身の気分の改善をもたらすという肯定的な感情的効果を有することを示した（山崎, 2012）。また、その研究では、演奏に対する評価には「楽しさ」と「満足」という二つの側面があり、前者には対人的側面が大きく関わるのに対し、後者には演奏の質的側面が主として関わることが示唆された。

本研究では、以上のことを踏まえて、日常的な合奏活動においても演奏者への感情的効果が生じることを確認するとともに、合奏活動のどのような側面がそうした感情的効果に関わっているかを調べることを目的として質問紙調査をおこなった。

学校での音楽の教科教育とは別に吹奏楽や軽音楽の合奏活動をおこなっている 22 名（全員女性、平均年齢 20 歳）を対象に、「今までで一番良かった合奏」および「今までで一番つまらなかった合奏」について、その時の状況やそう感じる理由などについて尋ねた。その結果、「良かった合奏」については、練習（25.6%）よりも本番（53.9%）で生じたという回答が多かった。良かったと感じる理由としては、「楽しかった」（29.2%）、「達成感があった」（25.0%）、「人間関係が良かった」（12.5%）、「良い評価を受けた」（10.4%）の順であり、「楽しさ」に対人的側面が大きく関わるという先行研究の結果とあわせて考えると、対人的側面と演奏の質的側面が概ね拮抗しており、両者を合わせて 7 割強を占めていたと考えられる。

一方、「つまらなかった合奏」については、「良かった合奏」とは逆に、練習（73.1%）の方が本番（19.2%）よりも多かった。つまらなかったと感じる理由としては、「練習不足」（31.4%）、「人間関係が悪かった」（28.6%）、「楽しくなかった」（11.4%）の順であり、ここでも対人的側面と演奏の質的側面が拮抗しており、両者を合わせて約 7 割を占めていた。

このように、実際の合奏活動においても、肯定的および否定的な感情的効果が生じており、そのどちらにおいても合奏活動における対人的側面と演奏の質的側面が同程度関係していることが示された。ただし、肯定的な感情的効果は本番で多く生じ、否定的な感情的効果は練習で多く生じるといった違いも見出された。

音楽の意義について、近年、人類の適応という進化論的な見地からの議論が盛んになっており、たとえば音楽の適応的機能は個人をより集団志向にすることである（Dunbar, 2012）といった主張がなされている。こうした機能が演奏者の快感情を媒介として成立すると考えるのは自然であり、本研究において合奏への評価の大きな部分を対人的側面が占めたことと整合的であろう。

引用文献

Dunbar, R.（2012）. On the evolutionary function of song and dance. In Bannan, N.（ed.）, Music, language, and human evolution, pp. 201－214. Oxford: Oxford University Press.

Juslin, P. N. & Sloboda, J. A.（Eds.）(2010), Handbook of Music and Emotion. New York: Oxford University Press.

Peretz, I. & Zatorre, R.（Eds.）（2009）, The cognitive neuroscience of music. New York: Oxford University Press.

Steptoe, A.（2001）. Negative emotions in music making: the problem of performance anxiety. In P. N. Juslin & J. A. Sloboda（Eds.）, Music and emotion（pp. 291-308）. New York: Oxford University Press.

山崎晃男（2012）. 合奏による演奏者自身の気分変化について. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 2, 35−42.